

第22回

函館港イルミネーション映画祭  
第20回シナリオ大賞

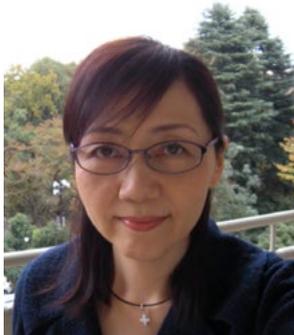
準グランプリ

2016

# 函館ラブ・ストーリーリーズ

日登美杏





【作者プロフィール】

ひとみ あん

東京都出身。某新聞社にて派遣社員として15年ほど勤務。  
2010年より東京・青山のシナリオセンターにて基礎  
から学ぶ。

【あらすじ】

雪山で遭難した男を助けるために人間に入れてはいけない狐の魂を入れてしまった狐の玉子は権現様の怒りを買って人間界に放り出される。元に戻るためには男から魂を抜き取らなければならないがロックスターとなったその男ジェイは引退宣言をして行方をくらます。

玉子はジェイを捜しにジェイの故郷である函館に向かう。だが函館山で知り合った奇妙な男、透になぜか惹かれる。実は透はジェイなのだが末期癌の元恋人花南のそばに居る為に函館に帰っていた。

透と花南はかつて小さな行き違いから少しずつ誤解が生じ、透の将来の選択を尊重し

た花南が本当の気持ちを言えないまま透を東京に送り出していた。その溝を埋めるように透は花南との距離を縮めようとしていた。

ジェイと気づかず透が気になる玉子はあれこれ透を心配する。だが透はジェイを捜しに来た事務所の社長と玉子が一緒にいる所を見て勘違いをし玉子に冷たい態度をとってしまう。心が痛み大泣きする玉子。

花南が亡くなり透はまた行方をくらます。透が戻るのを待つ玉子は透の友人、健吾からかつて透が雪山で遭難し奇跡的に生還した話を聞き透がジェイであることを知る。その後の透の変化が歌手への道を進ませたことを知った玉子は自分のせいで透と花南の運命が変わってしまった事を悔やむ。

透にもう一度歌ってほしいと望んだ花南の意志を継いで珠子は知り合った地元誌の編集者千夏とノブに相談する。ノブは偶然出会った透がジェイだと知りスクープを撮ろうと透の周辺を嗅ぎまわっていたが千夏にたしなめられ落ち込んでいた。千夏はジェイにもう一度歌ってもらうためにある方法を思いつきノブと玉子に指示をする。それはファンに協力してもらいジェイにメッセージを送ることだった。玉子は透から魂を取ることを諦める。「人間でいることは辛いけどジェイの歌があれば生きていける」そう言つて人間として生きることを選択する玉子。

【登場人物】

- 赤羽玉子 (22) 狐の化身  
宇佐美透 (27) (17) ロックスター  
佐藤千夏 (33) タウン誌編集長  
駒田ノブ (29) タウン誌カメラマン  
太田健吾 (27) (17) 透の幼馴染み  
吉井花南 (27) (17) 透の恋人  
香田美里 (50) 芸能事務所社長  
江波君江 (57) 花南の母親  
吉井 (17) 花南の夫  
エリ (23) タウン誌事務員  
花南の祖母 (75)

## ○雪山

登山装備の宇佐美透（17）が雪に埋もれている。意識はない。

子狐がやってきて透の周りをうろつく。

× × ×

（子狐の回想）

ロッジの近くで足に怪我をして動けない子狐を透が助ける。

× × ×

透の口に金色に輝く珠を入れる子狐。

うつすらと目を開ける透。

## ○狐世界

九尾の狐が現れ、怒りで子狐を尻尾で振り払い人間世界に放り出す。

## ○ライブステージ

T・10年後

きらびやかなライティングの中でロックスターらしい華やかな衣装とメイクを施したジェイ（27）がバンドを率いて激しく歌っている。

数万人はいるかと思われるファンは大いに盛り上がっている。

最後の曲が終わると、みんなありがとう！と手を振るジェイ。

息を整えるジェイ。

ジェイ「今までありがとう！ 楽しかったよ。俺は今日ですべての音楽活動を止めます」

えーっ！とざわめく会場。

ジェイ「みんな元気です！ さよなら！ グ

ッバイ！」

投げキッスをしながらステージを去っていくジェイ。

悲鳴に近い叫声が会場に響き渡る。

最前列で呆然としている赤羽玉子

(22)

## ○芸能紙面

次々と踊る紙面。

〈ジェイ、突然の引退宣言！〉〈ジェイに何が！〉〈ジェイ、消息不明〉〈ジェイ、謎の行動、各地で目撃証言〉

## ○SNS画面

ツイッターなどのスマホ画面。

〈ジェイ、大阪の心斎橋で見たよ〉〈沖

縄にジェイいたよ〉〈ジェイ、熊本に  
いるらしい〉〈ジェイ、友達が成田で  
NY行きの便に乗ったの見たって〉  
〈香港でジェイ見たって人いるよ〉

## ○北海道・函館山からの函館の街並み

## ○函館・タウン情報誌『ハコタン』編集部

佐藤千夏(33)と駒田ノブ(29)が  
パソコンでツイッター画面を見てい  
る。

千夏「なーんで函館で見たっての出ないか  
なあ」

ノブ「んだな。ジェイの故郷だべ」

千夏「一番可能性高いっしょ」

ノブ「だけどさ。地元だから出ないんでな

いの？ 函館の人間はやさしいからジェイ、見かけても言わないっしょ。疲れた心を癒してゆっくりしてもらいたいと思ってるんでねえの」

自分の言葉にうなづくノブ。

千夏「なーに、甘ったれた事言ってるの！

ジェイ、見つけりやスクープでしょ。

函館一気に注目浴びるっしょ。ほたらう

ちらの広告収入も伸びるっしょ」

ノブ「千夏さん、シビアだよね」

千夏「東京にいないんならこっち来るよ。

絶対！」

ノブ「見つけてインタビュー取れたら最高

だべな」

千夏「！」

ノブ「千夏さん？」

千夏「ノブ、行くよ！」

飛び出す千夏。

ノブ「ち、千夏さん！ どこさ行くの？」

カメラを持って慌ててついて行くノブ。

エリ（23）が振り返りもせず淡々と、

エリ「いつてらっしやーい」

○東京スカイツリーの見える街並み

○北区王子稲荷神社

玉子が狐の像が置かれている敷地を通る。本宮裏の鳥居をくぐり洞穴のお稲荷さんの前で手を合わせる。

玉子「権現様、ジェイがいなくなりました。

どこにいますか？……教えてください！」

日本地図を開いて玉子が指を置くと動いて函館を指す。

玉子「函館かあ……。よしっ！」

### ○走る北海道新幹線

### ○北海道・新函館北斗駅

リュックを背にホームに降り立つ玉子。

『ようこそ！ 函館へ』のポスター。

### ○タイトル「函館ラブ・ストーリーーズ」

### ○函館山ロープウェイ

### ○同・展望台

展望台から函館の街並みを眺める玉子。

玉子「これが函館かあ。うーん……。広くもないが狭くもないか。どこから攻めるかな」

ガイドブックを取り出す玉子。

玉子の後ろで走り回っている宇佐美透（27）。黒縁眼鏡をかけ、ぼさぼさの髪によれよれのTシャツとジャージ。雪駄を履いている。ビニール袋から茹で卵を取り出しかぶりつく。

喉を詰まらせゴホ、ゴホと咳き込んでマグボトルから豪快に水を飲んでる。

玉子「（怪訝に見て）変な奴」

○市電

市電に乗って街並みを見ている玉子。

函館アリーナが見えてくる。

玉子「(ハツとして) あれ? あれなに?」

隣に座っていたおばちゃんが、

おばちゃん「函館アリーナさ。一昨年出来

たのよ。GLAYがこけら落とし公演やつ

たの」

玉子「!」

○函館アリーナ・前

アリーナの前で見上げている玉子。

玉子「これが函館アリーナかあ……ジエイ

もやりたがってたのに……」

カメラを構えたノブが玉子にぶつか  
る。

ノブ「あ、ごめんね。だいじよぶ?」

千夏が離れたところから、

千夏「ノブ、はやく!」

ノブ「あ、くそ! ジエイに逃げられる!」

玉子「ジエイ?」

ノブの後を追う玉子。

× × ×

千夏「そこ!」

千夏が指さす先にスタイリッシュな

男が歩いている。

ノブがカメラを構える。

ファインダー越しに男のアップ。

横を向いた顔は別人。

ノブ「はんかくせー。違ったべ」

千夏「(舌打ちして) ちっ!」

玉子が横からファインダーを覗き込

む。

千夏「誰？　この子」

ノブ「さっきの……」

玉子「ジェイ、いたんですか？」

ノブ「い、いや……人違い……」

千夏「ジェイのファン？」

玉子「ジェイ、捜してるんですか？　私も」

千夏「……どこから来たの？」

玉子「東京です」

千夏、呆れたように、

千夏「いるんだよね。ゆかりの地めぐりみ

たいなの。でも追っかけ、無理だから」

玉子「ジェイ、函館にいるはずなんです」

千夏「東京に帰んなさい。ジェイの目撃証

言ないから」

玉子「でも、今探してましたよね。てこと

はジェイいるって確信しているんですよ」

ノブ「あのね。千夏さんは確信して動く人

じゃないから。動いてから確信する人だ

から」

千夏「ノブ、あんた、それ褒めてんの？」

ノブ「え？　ほ、褒めてないだべか？」

玉子「……あの、マスコミの方ですか？」

ノブ「ハコタンってタウン情報誌作ってん

のさ。今はネットのウェブサイトが主力

だけどね」

小さなコミュニティ誌を渡すノブ。

千夏「ノブ、行くよ」

ノブ「(玉子に) あ、だば」

玉子「あのっ！　一緒に捜しませんか？」

千夏「(振り向き) ……何言ってるの？」

玉子「私たち、目的同じですよ。だって一緒に捜した方が効率いいと思うんです」

千夏「(呆れて) はあー? あなたね、私たちは仕事なの。あなたはただのファン。」

追っかけ。ストーカー。わかる?」

玉子「でも、情報共有したほうが……」

千夏「情報ってね、あなた、どんな情報持ってるって言うのよ。函館の事なんも知らないっしょ」

玉子「函館の事知らなくてもファンのこと舐めちゃいけません」

携帯を取り出しメモを見る。

玉子「湯の浜町にジェイが育った家があります。卒業したのは函館第二高校。船見町にはジェイのお母さんのお墓。ジェイ

が函館に来るたび必ず行くお店は五稜郭近くにあるラーメン宝。ひとりになりたいた時に立ち寄るのは穴瀬海岸。お気に入り場所は函館山展望台……」

呆れる千夏。

千夏「おっそろしいわね。ジェイも芸能界、辞めたくなるわけだ」

玉子「この程度ならファンみんな知ってます」

千夏「それだけ知ってるなら自分で捜せば?

ノブ、行くよ!」

千夏が行ってしまうと、

ノブ「(こっそり) 今、言った場所、千夏さんもう全部行ったから」

千夏の後を追うノブ。

玉子「……捜しますよ。もちろん」

○五稜郭公園

歩き回る玉子。

ぐったり疲れて座り込む。

○ハリストス正教会

見上げてお尻を搔く玉子。

○高田屋通り(夕)

重い足取りで坂を上る玉子。

○金森赤レンガ倉庫

若い男の顔をいちいち覗き込む玉子。

玉子「あ！」

急ぎ足になる玉子。

○穴澗海岸

座っている若い男に近づくと玉子。

○護国神社(夕)

本殿の前で手を合わせる玉子。

○坂道

弥生坂、八幡坂などを登ったり下りたりして捜す玉子。

玉子「ジェイ、どこにいるんですか？ 早く会わせてくださいよ……………」

何の手ごたえもなくがっくりする玉子。

玉子「あれ？ ここ通った気がする……………」

玉子「何もなしですか？」

横を見ると縁結びのフクロウのお札

が売られている。

売り子「縁結びのご利益がありますよ」

玉子「この際、フクロウでもいいか……」

気配がして振り向くと本殿の脇でキ

ツネがこちらを見ている。

玉子「！」

本殿裏に去っていくキツネ。

玉子「待って！」

山の茂みを登って行くキツネ。

上を見ると民家が見える。

鳥居を出て山道へ向かう玉子。

足元がふらつきへたり込む。

玉子「朝、パンしか食べてないんだった

……」

ぐったりと倒れ込む玉子。

× × ×

西日が木陰から差す中、ケーンと言  
うキツネの鳴き声が響く。

玉子が目を開けると目の前に茹で卵  
が入ったビニール袋がぶら下がって  
いる。

玉子「！」

透がしゃがみ込んで玉子を見ている。

透「こんなところで寝てると死ぬよ」

玉子「え？ え？」

透「もう、陽が落ちるからね」

子。キツネを捜して登山道を駆け登る玉

子「(立ち上がろうと) あっ、すみません！

### ○函館山登山道(夕)

大丈夫、です……………」

ふらつき気を失う玉子。

### ○アパート・透の部屋（夜）

炒飯の炒める音に目が覚める玉子。

台所で料理している透が振り向き、

透「起きた？」

玉子「（部屋を見渡し）……………ここは？」

透「俺の部屋」

慌てて起き上がる玉子。

透が卓袱台にフライパンを持ってき

て炒飯を二枚の皿に取り分ける。

茹で卵を真ん中に立てる透。

玉子「（見て）……………」

透「食べなよ」

玉子「あ、いえ、私……………」

透「氣い失つても腹は鳴るんだな」

クスツと笑う透。

玉子「（立ち上がり）か、帰ります！」

透「食つてから帰れば？ 送ってくから」

茹で卵をスプーンで潰し炒飯と一緒に

に豪快に食べる透。

玉子のお腹がぐうーと鳴る。

透「ほれ！」

玉子「……………」

透の真似をして卵を潰す玉子。

寝ていた布団を横目で見ると

玉子「あ、あの……………私に何もしてませんよね」

ごほつと吹き出す透。

玉子「私、人間の男と交わっちゃいけない

んです」

透「……………へえー。じゃあ、何となら交わっ

てもいいの？ 狼？」

玉子「お、狼なんて、あんなケダモノ！」

透「ケダモノねえ……」

くすつと笑う透。

× × ×

食べつくした皿。

玉子「御馳走さまでした。美味しかったです」

透「家、どこ？ 送ってくよ」

玉子「え？ どこって……その、旅行者な

んで……」

透「ホテル？ どこ？」

玉子「ひ、ひとりで大丈夫です。助けてい

ただいて有難うございました」

慌てて部屋を出ようと玄関を開ける

と暗闇に街灯がポツンと点いている。

透「山ん中のアパートだからね。女の子ひ

とりじゃ物騒だよ」

玉子「……」

透の携帯が鳴る。

携帯を見て顔色を変える透。

透「……悪い。行かなきゃなんないところが

出来て。街までいい？」

玉子「あ、はい……」

○同・前（夜）

バイクにまたがりエンジンをかける

透。

透「乗って」

玉子にヘルメットを渡す。

玉子「……」

○坂道（夜）

街の明かりに向かって坂を下るバイク。  
ク。

透が戻ってきて、

透「ホテルまで送るよ」

玉子「……」

透「どこ？」

玉子「……まだ、取ってないの」

透「……」

○十字街（夜）

玉子を降ろす透。

透「じゃ、気を付けて」

急いで行ってしまう透。

玉子「あ……」

と、頭のヘルメットに気づく。

× × ×

バイクを走らせる透。

透「……」

思い返したように来た道に戻る。

× × ×

玉子が植込みの脇にしゃがんでいる。

○漁火通り（夜）

玉子を乗せてバイクを走らせる透。

○総合病院・前（夜）

玉子を乗せた透のバイクが停まる。

玉子「（病院を見て）……」

○同・ロビー（夜）

人気のないベンチに座っている玉子。

透が行った方を見る。

ますので

透「……」

### ○同・処置室（夜）

点滴が終わった吉井花南（27）が看護師に処置してもらっている。

### ○同・廊下（夜）

看護師と君江が処置室から出てくる。

透を見て、

すれ違うようにやってくる玉子。

花南「何しにきたの？」

開いたドアの隙間から処置室を覗く。

隣に立っている江波君江（57）。

君江「花南、私が連絡したのよ。何かあったら透さんに知らせることになってたから」

### ○同・処置室（夜）

透「今夜は俺もいるよ」

花南「……関係ないのに」

花南「付添はダメなのよ」

透「大丈夫？」

透「じゃあ、外にいる」

花南「大したことないわ。疲れが出ただけ」

立ち上がる花南を抱きしめる透。

看護師「念のため、今晚は病院に泊まって

透「花南、東京に行こう。大学病院でもう

もらいます。先生からそう指示が出てい

一度見てもらおう」

花南「……」

透を抱き返そうとして手を止める花南。

花南「……どこにもいかないわ。私はここで生まれ育ったの。函館以外知らない。

死ぬときはここで死ぬ」

透「……」

### ○同・廊下（夜）

花南を抱きしめる透を見つめる玉子。

### ○同・外（夜）

バイクの側に座っている玉子。

透が出てくる。

透「待たせてごめん。行こう」

### ○通り（夜）

玉子を乗せた透のバイクが走る。

玉子「……」

透の腰にまわした手を強く握る玉子。

### ○松前旅館・前（夜）

年季の入った古い旅館から出てくる透。

バイクの側に立っている玉子に、

透「ひと部屋空いてたよ。話はあるから」

玉子「どうもありがとう……」

バイクのエンジンをかける透。

健吾「透！」

太田健吾（27）が旅館から出てくる。

健吾「おめさ、いつまで……」

玉子を見て口をつぐむ健吾。

透「(玉子に)俺のダチ。いいやつだけど旅

館は古くさくて夜中に出るから」

健吾「馬鹿言うんでね。ちゃんとお札は貼

ってある」

透「(笑いながら)じゃ、よろしく」

健吾「透!」

行ってしまう透。

### ○同・部屋(夜)

玉子を部屋に案内する健吾。

記帳を見ながら、

健吾「赤羽玉子様……東京からおひとり

で?」

玉子「はい……旅行で……」

襖をあけると狭く薄暗い部屋。

健吾「すみませんね。夏の書き入れ時でこ

こしか空いてなくて」

玉子「助かります。こんな時間にすみません」

健吾「なんも。透の知り合いだもの。食事

は終わってしまったども簡単なものなら

用意出来ますけ」

玉子「あ、もう食べました。卵炒飯」

健吾「(驚いて)……透のこしらえた?」

玉子「え? あ、はい……」

健吾「あの……透とはどういった……」

玉子「(焦って)あ、なんでもないです!

お腹すきすぎて函館山で行き倒れていた

ところ助けてくれて。それだけです!」

健吾「……そう。そうですか……じゃ、風

呂はここ出て右手にありますんでごゆっ

くり」

健吾が出ていくと部屋を見渡す玉子。

床の間にキツネが月夜の下で戯れて

いる古い掛け軸が飾つてある。

それを見て、

玉子「なんだ。出るつてこれか」

× × ×

布団に寝ている玉子。

考え事をしていると、天井の隅に狐

が現れ玉子の周りを漂う。

玉子「(気にも留めず)……」

× × ×

(フラッシュ)

透が切なげに花南を抱きしめている。

× × ×

玉子「あー、もうっ!」

布団を被る玉子。

拍子抜けした狐がぼんつと消える。

## ○ハコタン編集部

千夏がパソコンの編集画面を見ている。

千夏「ノブー。この写真、背景良くないよー」

びくつとするノブ。

千夏「ノブー。この見出しタイトル変えてー」

ノブ「はい!」

千夏「ノブー、これ、情報源どこー?」

ノブ「えっとー、えっとお……」

データを捜すノブ。

エリがノブに、

エリ「千夏さん、どうしたんですかね」

ノブ「しっ。千夏さんが語尾を伸ばして話

すときは要注意だべ」

千夏「ノブー、北斗駅の駅長インタビュー、

アポ取ったあー」

ノブ「あ、すみません。すぐに！」

千夏の携帯が鳴る。

携帯を睨んで動かなくなる千夏。

千夏「……」

ノブ「ち、千夏さん。取らないんですか？」

勢いよく携帯を掴み部屋を出ていく

千夏。

エリ「なにごとですかね」

ノブ「……」

### ○同・廊下

携帯で話している千夏。

柱の陰で聞いているノブ。

千夏「私たち、やり直せないわ。子供も渡

せない。話し合いはもう十分したはずよ」

ノブ「……」

千夏「そんな言葉聞きたくない。何一つ理

解しようとしなかったのに、努力するっ

て？なにそれ！」

ノブ「……」

千夏「もう、会わないわ。会う時は裁判所で」

ノブ「(複雑に)……」

### ○松前旅館・受付ロビー(朝)

玉子が受付で、

玉子「あのー、すみません」

健吾が出てきて、

健吾「おはようございます。お食事はまも

なくでございます」

玉子「いえ、あのお……」

× × ×

ロビーで話す玉子と健吾。

健吾「透ですか……」

玉子「お世話になったお礼をしたいのですが夕べはどこにアパートがあったのかも分からず名前も聞かなかったので……」

健吾「……透はお礼なんて望まないと思いますよ」

玉子「でも、私の気持ちか……」

健吾「……」

玉子「済まないの……」

健吾「……だったら函館山の展望台に行ってみてください。午前中いることが多いので」

### ○函館山・ロープウェイ山頂駅

透を捜す玉子。

ゴンドラから降りてくる人々を何度

も見送る玉子。

玉子「今日は来ないのかなあ……」

時計は12時半を回っている。

玉子「そっか……昨日の病院かも！」  
溜息をつき、

玉子「何やってんだ、私。ジェイを捜さなきゃならないのに……」

ぐうーとお腹が鳴る。

玉子「(お腹をさすって)……」

### ○ラーメン宝・前

宝の看板を見ている玉子。

玉子「よし！　ここで腹ごしらえ！」

### ○同・中

玉子が店に入るとすぐ前のカウンタ

―で透がどんぶりを抱え飲み干して  
る。

玉子「あ！」

透「(見て) あ……」

呆然と言葉が無い玉子。

透「出た？」

玉子「え？」

透「ばけもん」

玉子「……」

透「出たんだ」

にやりと笑う透。

透「まあ、悪さはしないとと思うから」

会計をして出て行こうとする透。

玉子「あ、待って！」

ぐうつと玉子のお腹が鳴る。

透「(笑って) 早く食った方がいいよ」

玉子「ひ、一人じゃ食べれないから……」

透「……」

× × ×

テーブル席で向かい合っている玉子

と透。

玉子「すみません。付き合ってもらっちゃ

って」

玉子のラーメンが運ばれてくる。

玉子「あの、おごりますからなんか注文し

てください」

透「いや、俺、二杯食ったから」

玉子「え!？」

透「卵も追加したし」

玉子「卵、好きなんですわね」

透「子供の頃、腹減るとね、おやつ代わり

に食ってた。近くに温泉があつてさ。健

吾と……あ、健吾ってのは昨日の旅館の跡取り。あいつとこっそり温泉に卵を入れて温泉卵にするんだ。一回、固まる前に割れちゃって番頭にこっぴどく怒られたよ」

笑う玉子。

透「ここ、餃子も美味しいよ」

玉子「あ、じゃあ一緒に食べませんか？」

透「餃子食うとビール飲みたくなるんだよね」

玉子「じゃあ、ビールも！」

透「俺、行くところあるから……」

玉子「……」

透「悪いね」

玉子「……昨日の病院ですか？」

透「……」

玉子「恋人……ですか？」

透「人妻」

玉子「！」

透「それじゃ……」

透、玉子の領収書を持って立ち上がりレジで支払いをする。

慌てる玉子。

### ○同・前

店を出て透の後を追う玉子。

玉子「待って！ 私、私……探してたんです。

昨日のお礼もしてないのに奢ってもらう

なんて……」

透「そんなもん、いいよ」

玉子「良くないです。何か私に出来ること

させてください！」

透「……………」

透の手の温もりに赤くなる玉子。

× × ×

### ○駅前デパート・帽子売り場

売り場を離れると手を離す透。

夏らしい帽子が並んでいる。

玉子「(残念そうに)……………」

花飾りがついた麦わら帽子を手に取る玉子。少し離れたところにいる透

透「有難う。買い物も人混みも苦手なんだ」

に見せると頷く。

玉子「その帽子、病院の女性にですか？」

レジに持って行き、

透「……………」

透が支払おうとする

玉子「人妻なのに……………」

と店員が透を見

透「高校の同級生だよ」

る。

玉子「ふーん……………」

首を傾げ、透の顔を覗き込もうとす

玉子にドンとぶつかるノブ。

る。

ノブ「あ、申し訳ね……………あれ？」

透、玉子の肩を抱き、

ノブ「あ、昨日の……………」

透「行くべ！」

ノブ「ジェイ、見つかったただべか」

その場を急いで離れる透。

玉子「あ、それが、その……………まだ……………」

ノブ「やっぱ、函館にいないんだべな」

ノブ「やっぱ、函館にいないんだべな」

透を見るノブ。

ノブ「……」

透「それじゃ」

足早に去っていく透。

玉子「あ！……」

ノブ「邪魔しちゃったただべか」

玉子「あ、いいえ……取材ですか？」

ノブ「ジエイばかり追いかけているわけに

も行かんべな。ちゃんと仕事しないとお

まんま食えなくなるべ。夏の百貨店売れ

筋情報も仕入れとかないとなんね」

玉子「麦わら帽子ですよ」

ノブ「？……あっ！」

玉子の腕を引っ張って隠れるノブ。

玉子「な、なんですか？」

ノブが見ている先に千夏が男と歩い

ている。

玉子「あれ？ こないだの」

ノブ「千夏さんだべ」

玉子「相手の方はどなたですかね」

ノブ「旦那だ。会わないって言ってたのに」

玉子「へえ……で、なんで隠れるんですか？」

ノブ「……」

### ○居酒屋（夜）

ノブと玉子が一緒に飲んでいる。

テーブルには海鮮ものが並んでいる。

玉子「おいしいですよ！」

ノブ「函館ついたらイカの刺身だべ。ホッ

ケだべ。たんと食え！」

出来上がってる玉子とノブ。

玉子「つまりい、ノブさんは千夏さんのこ

とが好きなんですわね」

ノブ「声がおつきいべ。……だども、千夏さんが俺なんか相手にするわけね」

玉子「わかってないすねー。誰かを愛するってのは見返りを求めちゃいけないんですよ。いいっすか？ 相手を思う気持ちが一番大事なんです。見返りを求めるから辛いんす」

ノブ「それジェイのことだべ。ゲーノー人と一般人と一緒にするんぞね」

玉子「ゲーノー人だって狐だって恋をしますよお。魂があるものはみな恋をするんです」

ノブ「きつね？ 何言ってるんだべ」

玉子「だから辛いんじゃないっすかあ。私、人間の男を好きになっちゃって元に戻れ

ないんですう」

ノブ「玉子ちゃんは人間でねえのか？」

玉子「人間ですう。普通の恋する女の子ですう。昔い、ポカやらかして人間にさせられたんですう」

ノブ「何したんだべ？」

玉子「人間に入れちゃいけないキツネの魂をジェイに入れちゃったんですう。私、権現様に罰を食らってるんですう」

大笑いするノブ。

ノブ「玉子ちゃん、おもしれえな。まるで人魚姫みてえだな」

玉子「人魚姫は王子を殺さなきゃ海に戻れないじゃないですかあ。私はあ、魂を抜かなきゃ元に戻れないんですう。でもジェイの歌声に惚れちゃってえ魂を取れな

いんですう。元に戻る為にはジェイを探さなきゃいけないのに、私の心には別の……別の……」

うわあーつと突つ伏して泣き出す玉子。

ノブ「俺のコイバナの相談にのつてくれるんじやなかったんけ？」

玉子、ガバツと顔を上げ、

玉子「ノブさん、その恋成就してくらさい！  
一人くらいそんな人がいないと救われない」

ノブ「だから千夏さんは人妻だってばさ」

玉子「人妻……妖しくも悲しい響きつすねー」

ノブ「だな。千夏さんが離婚したら俺にも望みはあんのかな？」

ノブ、はあつとため息をつき、

ノブ「人の不幸を願うようになつちや俺もお終いだべな……」

玉子「人の不幸……」  
ううつとテーブルに突つ伏す玉子。

### ○病院・前（夜）

透がバイクの前で花南のいる病室の窓を切なげに見上げている。

### ○（回想）病院・ロビー

透が泣いている君江と話している。

君江「花南、このまま入院することになったの。我慢してたみたいだけど、もうかなり辛そうなの」

透「……」

○（回想）同・病室

ベッドの花南の元にやってくる透。

麦わら帽子を出して、

透「出かけないか？」

○（回想）同・屋上

麦わら帽子を被った花南が車いすに

座って遠くを見つめている。

花南「外は気持ちいいわね」

花南の車いすを押してる透。

花南「函館山が見えるわ」

透「ああ……」

花南「よく一緒に登ったよね」

透「俺、毎日登ってるよ」

花南「（笑って）毎日？ なぜ？」

透「あそこが好きなんだ。函館の街を全部

見渡せる。育った町や学校や花南と歩い

た湯の川の海岸……」

花南「……」

透「昨日のことのように全部思い出せる」

花南「……東京に帰らないの？」

透「帰るところはここだ」

花南「待つてる人がたくさんいるわ」

透「花南が待っていてくれればそれでいい

よ」

花南「…………」

○通り

街路樹が風に大きく揺れる。

○松前旅館・ロビー受付

健吾が受付にいる。

香田美里（50）が入ってくる。

健吾「いらっしやいませ……」

ハッとする健吾。

美里「こんにちは。透、来てるかしら」

健吾「……」

言ったけど連絡先書いて置いてった」

玉子がよろよろとやってくる。

健吾「なんもなんも。迷惑なんぞかかって

ない。それより透、おまえの方は大丈夫

だべか」

玉子「（聞いて）透？」

健吾「また山に登ってんのか？ 10年も前

の手紙だべ。俺がうっかり言っちゃまった

から」

玉子「……」

健吾「花南に直接聞いてみればいいべ……

いいたって……」

聞き耳立ててる玉子。

健吾「透？ 良く聞こえねえが……電波が

悪いだべか。おめ、どこさいるんだ？」

玉子「……」

## ○同・玉子の部屋

布団の中で頭を抱えている玉子。

玉子「うろう……気持ち悪い……」

布団から這い出て時計を見る。

玉子「もう昼か……ジエイ、捜さなきゃな

んないのに……」

## ○同・ロビー受付

携帯で話している健吾。

健吾「透、香田さん来たべ。知らないって

健吾「とにかくこっちには近づくな。ああ

……気をつけてな」

携帯を切ると玉子に気づく健吾。

健吾「あ、お早うございます。よくお休み  
になれましたか？」

玉子「寝すぎちゃって……夕べはご迷惑か  
けませんでしたか？」

健吾「なんも。お友達がちゃんと送って  
くださいましたよ」

玉子「お友達？」

健吾「今朝も迎えに来たけどまだお休み  
中だと話したらひとりで行くから寝かせ  
ておいてくれと言っていました」

玉子「………あっ！」

× × ×

居酒屋で。

ノブ「明日は函館山の取材が入ってんだ。  
送るから。この辺でお開きにするべ」

玉子「函館山？ 私も連れてってくらさい」  
ノブ「ロープウェイで行くんじゃなくて登  
山コース歩くから。その様子じゃ無理だ  
べ」

玉子「大丈夫つす。展望台目指します！」

× × ×

玉子「(がっくりして) あ……」

健吾「だども今日は台風が近づいてるから  
外出は控えた方がいいですよ」

玉子「台風？」

近くのテレビが台風情報を伝えてい  
る。

(回想)

『台風8号は急速に速度を増し渡島半

島に向かっています』

### ○函館山・登山道

透が突風に煽られて足を滑らす。

斜面を滑り落ちる透。

### ○函館山

風に煽られる樹木。

ノブの声「おーい、大丈夫かあ？」

ノブが上から見下ろしている。

斜面を上る透に手を差し出すノブ。

### ○同・登山道

透が山道を下っている。

透「有難うございます」

脇道からきつねが透を見ている。

ノブ「怪我不いか？」

透「(見て)……」

透「ええ、大したことないです」

携帯で写真を撮ろうと近づくと透。

ノブ「思ったよりも台風の足が速いようだ

べな」

### ○松前旅館・ロビー

透「そうですね。早めに降りた方がいいみたい

玉子「透さん、山にいるんじゃない……」

たいです」

健吾「ああ、あいつは大丈夫。慣れてっから」

ポケットを探る透。

玉子「でも……」

ノブ「どした？」

健吾「心配いらねっす」

透「携帯が……」

ノブ「下に落とすただか？」

ノブ・透「(下を見て)……」

### ○松前旅館・ロビー

テレビで台風情報を見てそわそわす

る玉子。受付に出てきた健吾に、

玉子「あの……透さんに電話しててもら

えないでしょうか？」

健吾「大丈夫ですって。函館山で遭難した

なんて聞いたことねえです」

玉子「でも……」

健吾「心配ねえ、心配ねえ。今頃もう麓降

りてますって」

玉子「……一回だけ電話してみてもらえま

せんか？」

健吾「……そんなに言うんなら……」

携帯を取り出し電話する健吾。

呼び出し音が鳴っているが出ない。

健吾「どしたんだべ……?」

かけ直すがやはり出ない。

健吾「電池切れてるわけでもなさそうだべ

な」

玉子「(不安げに)……」

× × ×

出かける準備をしている健吾。

健吾「ちよっくら透のアパート行って様子

見てきますけ」

玉子「私も行きます！」

健吾「いんや。風も強くなってきたんでこ

こにいてくだけせ」

玉子「行きます！ 行かせてください！」

健吾「……」

玉子「昨日、透さんと会ったんです。透さん花南さんのことや、いろいろ話してくれました。私、いっぱいお世話になっちゃって、お礼も十分してないのに、このままじゃ気が済まないです！」

健吾「……」

健吾「透！透！いねのか？」

アパートの裏側にまわる玉子。

真下に神社が見える。

玉子「あれ？あの神社、おとといお伺いたてた……」

× × ×

(フラッシュ)

狐が神社の裏の山道を登って行く。

## ○函館山・坂道

玉子と健吾が登山道へ続く坂道を登る。

玉子「……………」

登山道に向かう玉子。

健吾「あ、どこさいくんだ！」

## ○透のアパート・前

健吾「そこです」

健吾が指さすアパートを見る玉子。

「るんです！」

玉子「上に行ってみます！嫌な予感がするんです！」

玉子「登山道の入口にあったんだ……」

健吾「あぶねって！ひとりじゃ無理だ！」

健吾がドアの戸を叩く。

## ○谷地頭温泉

ぶわっと湯船から顔を出すノブ。

ノブ「ああ、気持ちええな」

隣で鼻の下までお湯につかっている

透。

ノブ「まさか、二人して落ちるとは思わな

かったべな」

透「すみません。ご迷惑かけて」

ノブ「なんも。携帯も泥だらけだべ。大丈夫

夫だっただべか」

透「あとで修理に持って行ってみます」

ノブ、透の顔をじつと見て、

ノブ「もしかしてと思ったけど……あんな

た……」

透「(目をそらし)……」

ノブ「昨日、玉子ちゃんと百貨店にいな

っただべか……」

透「え？」

ノブ「キツネの玉子ちゃん。面白い子だべ」

透「(ノブを確認して) ああ……」

ノブ「なんでもジェイを捜しに函館に来た

らしいんだけど、まあ、今どきの女の

子つてのは考えてることがぶっ飛んでる

べ」

透「……」

勢いよく湯船から出る透、

ノブ「(見て)！」

## ○函館山・登山道

山道を登っている玉子と健吾。

健吾「あー、こわっ！ 山登ったのなんて

何年振りだべ」

玉子「怖いですか？」

健吾「なんも、なんも。こわいつてのはこっちの方言。疲れるとかきついつて意味

だべ」

玉子「へーっ。そうなんですか……そう言

えば透さんはあまり癖ないですね」

健吾「あいつは東京さ行つてたから……」

ハッと口をつぐむ健吾。

玉子「え？ そうなんだ！」

健吾「あ、いや。まあ……俺が童つこん時、

江差のばあちゃんのとこ預けられてたから癖が強いつてだけで……さ、早く行く

べ」

玉子「透さん、大丈夫でしょうか？」

健吾「風も落ち着いてきたし心配いらねと

思うが……あいつは毎日山登つてっから」

玉子「バイクですか？」

健吾「いんや。透はバイクもロープウェイも使わね。探し物しとるんで」

玉子「探し物？」

健吾「うん、まあ……見つかるわけねえがな」

玉子「山の中で何を捜しているんですか？」

健吾「なんだべな……しいて言えば過去の

記憶とか、ホントの気持ちだべか……」

玉子「……それって花南さんと関係してる

ことですか？」

健吾「……」

玉子「……花南さんて結婚されているんで

すよね」

健吾「透はそんなことまでしゃべったべ

か？」

玉子「え、まあ……」

健吾「……俺ら高校の山岳部でな。花南と

透と俺。三人気が合つて、よつく一緒に  
つるんでたんだ。函館山もよつく登つて  
た。透は花南とも登つてたな……」

玉子「……」

健吾「それで、いつの間にか透と花南は付  
き合い始めたんだ……」

玉子「(哀れむ眼差し)……」

健吾「あ、気遣い無用だべ。俺はその頃女  
房と付き合い始めてたから」

玉子「……なんで透さんと花南さんは別れ

ちやつたんですか？」

健吾「そうだなあ……どこで歯車が狂つち  
まったただべか……」

## ○(回想) 高校

健吾の声「あの頃、透と花南の関係はちょ  
つとばかり、あずましくなかつたんだ」

吉井(17)が花南(17)と仲よさそ  
うに歩いている。

健吾の声「吉井と花南が文化祭の実行委員  
やることになって吉井がやたらと花南の  
周りうろつくようになって……」

花南の後を追いかける吉井。

打ち合わせをする花南と吉井。

健吾の声「花南は生真面目だから文化祭の  
準備に一生懸命で透との約束を何度か反  
故にしたことがあって……一度大事な用  
事をすっぽかしたこともあった。けど、  
それはちよつとした誤解だったんだ……」

○(回想) 海岸通り

風が強く吹き波が荒れている

健吾の声「その日は花南の父親の命日で。

墓参りに透も一緒に行くことになった。

花南の母親が仕事で行けなくて足の悪い

ばあちゃんに透がついて行くことにした

んだ」

○(回想) 花南の家・居間(朝)

花南が電話に出ている。

花南「えーっ！ なしてそんなこと！ 信

じられん！」

○(回想) 同・玄関(朝)

透が玄関先で花南の会話を聞いている。

杖を持った花南の祖母(75)が上り

框に座って待っている。

花南の声「うん、うん！ わかった！ す

ぐ行く！」

花南がやってきて透に、

花南「ごめん！ 透。お婆ちゃん連れてバ

ス停で待っててもらえる？ 学校でトラ

ブルがあつたらしくてちよつと行つてく

る」

透「……吉井？」

花南「うん！ 夕べの風で門のアーチが壊

れたらしくて。文化祭、明日だったのに」

透「……」

花南「ごめんね。お婆ちゃん。すぐに追い

かけるから」

飛び出していく花南。

透「……」

花南の祖母「すまないねえ。せつかく来てくれたのに」

透「あ、いえ……じゃ、先行つてみましょう」

○(回想) 高校・正門前

倒れて壊れた飾りアーチを見ている

花南と吉井と数人の生徒たち。

花南「ひどい……」

生徒1「明日までに直せるかな……」

吉井「直すさ！ 直さなきゃ！ せつかく

これまで頑張ったんだ。成功させるべ！」

生徒2「そうだな！ 徹夜してでも完成さ

せるべ！」

気合の入る生徒たち。

花南「……」

○(回想) バス停

仏花や酒瓶などお供え物を持った透と花南の祖母がベンチに座っている。

○(回想) 高校・体育館

生徒達がペンキを塗ったり釘を打ち直したりしてアーチを直している。

そつと離れる花南。

○(回想) 同・校舎

花南が公衆電話から家に電話する。

鳴り続けている呼び出し音。

× × ×

花南の家で鳴りつづけている電話。

× × ×

(花南の回想)

花南「ごめん！ お婆ちゃん連れてバス停

で待つてもらえる？」

× × ×

花南「……」

吉井が来て、

吉井「江波？ どした？」

電話を切る花南。

花南「うん……バス停でお婆ちゃんと約束

してたの。連絡つかなくて……」

吉井「どこのバス停？ 俺の弟に連絡して

行ってもらおうよ」

花南「そんな……」

吉井「いいって、いいって。あいつどうせ

ヒマこいてるんだから」

花南「……」

○（回想）バス停

通り過ぎるバス。

透と花南の祖母がベンチに座ってい

る。

透「先、行ってましようか？」

花南の祖母「……いいのよ。帰りましょ。

また出直すから……今日はすまなかった

ね」

寂しそうな祖母。

透「（見て）……」

× × ×

だるそうにやってくる吉井の弟（15）。

誰もいないバス停を見て舌打ちする。

○（回想）高校・体育館（夕）

体裁が整ったアーチを見つめる花南

達。

吉井「後は立てつけるだけだな。案外うま  
くいったな」

ホツとして嬉しそうに笑う花南と生  
徒達。と、花南の腕を掴む透。

花南「！」

透、腕を引つ張つて、

透「ちよつと来いよ！」

花南「透！」

吉井が香奈を掴む。

吉井「放せよ！」

透「お前に関係ない！」

吉井「お前こそ関係ないだろ！」

花南「吉井君！」

吉井「俺たち必死に頑張ったんだ。明日の  
文化祭成功させるためにみんなをやつて

きたんだ。もう少してとところで江波を  
連れてくな！」

透「……」

花南「違うの、吉井君。私が……」

花南の腕を離す透。

花南「透……」

黙つて去つていく透。

花南「透！ ごめん！」

### ○函館山・山道

山道を登っている玉子と健吾。

健吾「お互い好きあつてるのにちよつとず

つ気持ちが悪く感じた。表面上は付き合

つてたけど上手く気持ちが伝わらなくな

つてきたんだ」

玉子「……」

健吾「そんな頃、透は東京に行くことにな  
った」

玉子「就職ですか？」

健吾「……うん、まあ、そんなとこだ。だ  
が透は迷ってたんだ」

○(回想) 高校・廊下

透と健吾(17)が歩いている。

透が花南の姿を見つけて、

透「花南！」

花南の腕を捕まえ、

透「俺、東京行かないから」

花南「……なんで？」

透「俺は……」

花南「私のためだなんて言わないでよね。

そんな責任負いたくない。私たち未来の

選択は自由なんだから」

健吾「……」

透「……吉井の事、好きなのか？」

花南「……吉井君、いい人だよ」

透「……」

健吾「……」

○(回想) 透の部屋

山に登る準備をしている透。

健吾の声「透が東京に行く数日前、3人で

函館山に登ろうって提案したんだ。この

ままじゃまずいと思ってな」

○(回想) 花南の部屋

リュックに手紙を入れようとする花

南。

花南「(手紙を見つめて)……」

携帯にかけてみる健吾。

○(回想) 健吾の旅館(朝)

電話をしている健吾。

健吾「透? 悪い、俺行けなくなつたべ。

階段で足挫いちまつてな。花南と二人で

行つてくれ」

電話を切りほくそ笑む健吾。

○函館山・展望台

ガスが掛かつて何も見えない展望台

に不安げに立つ玉子。

山頂施設の方から健吾がやってきて、

健吾「聞いてみたけど、それらしい人間

はいねかつたそうさ。もう降りてんのか

もしれね」

健吾「今度は全く通じね。電源切れてるべか」

玉子「(泣きそうに)……」

健吾「とにかく降りるべさ。まんず、下に

降りてからだな……」

プ、プーっとクラクションが鳴る。

駐車場の方の車から顔を出す美里。

○車中

登山道を降りる美里の車。

車に乗っている玉子と健吾。

美里「せっかく函館に来たんだからと思つ

てレンタカー借りて登つてみたんだけど

何にも見えなかつたわ」

健吾「台風来てるんで……」

美里「まったく、人を捜しに来たのに先行

き暗示しているみたいなた天気だね」

玉子「あなたも誰か捜しているんですか？」

美里「あら、同輩？ 誰を捜しているの？」

玉子「私は……」

健吾「あ、あの！ 麓までいいですから」

美里「旅館まで送るわよ。ついでもありますもの」

健吾「……」

### ○松前旅館・前

透がやってくる。

美里の車が止まり玉子と健吾が降り

る。

笑っている玉子と美里を見る透。

透「……」

美里の車が去っていく。

透に気がつく健吾。

健吾「透！」

玉子「！」

健吾「透、無事だったべか？」

透を見て涙ぐんでいる玉子。

透「携帯壊れてしまって。着信入ってたみ

ただけどかけられなかった……」

玉子「透さん……」

玉子の前を素通りする透。

玉子「！……」

健吾「何度電話入れても連絡つかねから山

で何かあったんじゃないかねえかと心配して、

この玉子ちゃんが……」

透「(玉子の方を見ずに) 有難う。でも函館

山は庭みたいなものだから……」

玉子「……」

透のそっけない態度に、

玉子「……よ、良かったです……」

部屋に駆け込む玉子。

健吾「……」

透「さっきの香田さんだろ？」

健吾「ああ、展望台で偶然会ったんだ。俺

たちを乗せてくれて……」

透「今、香田さんに見つかって騒がれたく

ない。少しでも花南の側にいたいんだ」

健吾「わかつとる。香田さんはなんも気が

ついとらん」

透「……」

健吾「それより玉子ちゃん、お前の事えら

い心配しとったんだべ。何かあったんで

ないかと山まで登って……」

透「……香田さんの知り合いじゃないの

か？」

健吾「え？……」

### ○同・玉子の部屋

嬉しさと悲しさで大泣きしている玉子。

### ○ハコタン編集部

ノブがパソコンでジェイの写真検索  
をしている。

ノブ「これだ！」

ジェイがハーフパンツを履いた写真。

足元に鳥が羽ばたくタトウが見える。

× × ×

(フラッシュ)

温泉で見た透の足もとに同じタトウ。

× × ×

ノブ「間違いいねえ……」

### ○透のアパート前

透が部屋から出てくる。

離れたアングルから狙うシャッター

音。

バイクに乗る透。

シャッター音。

### ○病院・前

透がバイクから降りて病院に入っ

ていく。それを車の窓からカメラで狙

う。

シャッター音。

### ○同・庭

花南の車いすを押す透。

笑っている透。

シャッター音。

### ○函館港・埠頭

沿岸でぼんやりしている玉子。

ノブの声「玉子ちゃんでないか？」

ノブが立っている。

玉子「ノブさん……」

ノブ「久しぶりだね。ジエイは見つかつ

ただか？」

玉子「……気合が入らないです」

ノブ「見つからないか……」

玉子「何をやっても私って、本当にダメな

んだなって思います……」

ノブ「まあ、そう落ち込むこともね。もしもジェイが見つかったらどうすんだべ？ ほれ！ ジェイの魂を抜くんだべ？ 最高にいい女だったことを見せつけんだべ？」

玉子「なんか違うけど……全然、いい女なんかじゃないですよ……私」

ノブ「俺は一発、見せつけねばな。大きな仕事して千夏さんに認めてもらわねばな  
んね」

玉子「……私、本当に元に戻りたいのかな？

それともこれも罰なのかな……」

ノブ「玉子ちゃん？」

### ○病院・ロビー

走る透。

### ○同・病室

透「花南！」

透が入ると花南の傍で医者と看護師が処置をしている。苦しそうな花南。

透「……」

### ○同・廊下

泣いている君江。

### ○同・病室

症状が落ち着いて眠っている花南。

花南を見つめている透。

花南が目を覚ます。

透「おはよう……花南」

花南「(ぼんやりと) 朝なの？」

透「花南が目を覚ました時はいつだって朝

だ。これから楽しい一日が始まる」

うっすらと微笑む花南。

花南「また一緒に山に登れたらいいのに

……」

透「登るさ。何度でも」

携帯を出して写真を見せる透。

透「ここが出発地点だ」

登山道の風景写真を次々と見せる。

透「ほら、一番観音が見えてきた」

一番の札の傍に立つ観音像の写真。

花南「……函館山の三十三観音巡りね」

透「そろそろ七番観音が見えてくる」

花南「きれいな花が咲いてるわ。ここはツ

ツジ山ね」

透「ほら、駒ヶ岳が見える」

駒ヶ岳を望む写真。

花南「ほんとね。きれいに見える……」

透「ここ見て」

花南「蝦夷リスだわ。可愛い……」

ふうっと目を閉じる花南。

透「疲れた？ 少し休もうか」

花南「ううん……思い出していた。透が東京

に行く前、最後に登った時の事」

透「……」

### ○（回想）函館山・登山道入口

登山道入り口に立っている透（17）。

花南（17）がやってくる。

花南「健吾は？」

透「足を挫いたらしい」

花南「ほんと？」

透「見え透いた嘘だ。あいつ……」

花南「……」

つてきた」

× × ×

○(回想) 同・山道

(回想)

山道を歩く透と花南。

雪まみれでロツジに入ってきた透。

透「大丈夫か？」

驚く教師や仲間。救助隊の人々。

花南「うん。何度も登った道だもの。旭岳

× × ×

に比べればなんてことないよ」

花南「みんな泣いてたけど、私、大笑いし

透「当たり前だろ。比べるなよ」

ちゃった。先生にすっごく怒られて……」

笑う透と花南。

透「俺もつられて笑ったな」

花南「あの時は大変だったね……」

ふふっと笑う花南。

透「……生きてるのが不思議だった。助か

× × ×

つたのが信じられなかったよ」

(回想)

花南「ほんと。みんな諦めかけてた。でも私、

大笑いする花南。つられて笑う透。

きつと透は大丈夫って変な確信があった」

啞然とする周りの人々。

透「……」

× × ×

花南「そしたら雪だるまみたいになって帰

花南「あれからなんか、透変わったよね」

透「……」

花南「変な意味じゃなくて。眩しいって言うか、ドキドキするって言うか……」

透「惚れ直した？」

花南「……生きてるって感じが、した。でも……ちよつと近寄りがたい時があった……」

透「……」

花南「なんだろうなあ……私の側から離れていく感じがした」

透「……花南」

花南「当たったみたい。でもそれでいいんだって気もする。私たちそれぞれの未来があるんだもの」

透「……」

## ○(回想) 湯の川海岸通り

飛び立つ飛行機を見上げる健吾と花南。

健吾「いいんだべか。透行かせちまって」

花南「……いいの。透には新しい世界が待ってる」

健吾「だども、誤解したままでねえのか？」

ほんとは透の事……」

花南「ホントの気持ちなんて……言っでどうなる？ 私らまだ十七なんだよ。未来をこれから変えられる。透の未来の選択を邪魔したらだめなんだ」

健吾「花南……」

花南「ホントの気持ちはこの前、函館山のお地藏さんの側に埋めてきた」

健吾「透と山登った時か？」

花南「うん。手紙書いて渡そうかどうしようか迷ったけど、でもやっぱり私の言葉は邪魔になる。ホントの気持ちは透の為にならない。私のわがままだからね」

健吾「……」

### ○葬儀場

花南の遺影を持った君江が出てくる。

参列している健吾と玉子。

玉子「透さんは……?」

健吾「……昨日から姿が見えね」

玉子「……」

玉子「花南さんの旦那さんはどうしたんでしようか?」

健吾「……刑務所にいる」

玉子「!」

健吾「花南は透が東京さ行って四年後に吉井と結婚したんだ……だけど花南の気持ちはいつも別の方を向いてた。吉井はそれをなんとなく感じていたんだろ。吉井は花南に暴力を振るうようになったんだ」

玉子「……」

健吾「そのうち会社の金を横領してギャンブルにつき込むようになって。飲み屋で喧嘩して傷害でも訴えられてな」

玉子「……」

花南を乗せた霊柩車が去っていく。  
泣いてる人々を見る玉子。

健吾「吉井には花南の病気の事は知らされ

てね。花南がまだ歩けるうちに会いに行  
ったが吉井は花南に会おうとはしなかつ  
たんだ」

玉子「……」

### ○ハコタン編集部

何気なくノブのパソコンを見る千夏。

千夏「なにこれ？」

Jの名前の写真フォルダを開けると  
透を隠し撮りした写真が並んでいる。

エリ「覗いて）うわっ！ ノブさんこんな

趣味あったんですかね」

千夏「（見て）……」

ノブが入ってくる。

ノブ「あ！」

慌てて、

ノブ「あ、これは……その……」

エリ「ノブさん、誰にも言いませんよ」

ノブ「いや、これは、その……」

千夏「ノブ、これは誰なの？」

ノブ「……いやあ、もうちよつと秘密にし  
ときたかったんですけど……」

千夏「フォルダのJって？」

エリ「え？ ジエイ？」

ノブ「……ジエイです。偶然見つけてチャ  
ンスだっと思って追ってたんです。いろい  
ろ調べました。ジエイは癌を患っている  
元カノの為に函館に帰ってきたんですよ。  
毎日病院通ってます。この元カノ、旦那  
がいるんすが傷害と横領で刑務所に入っ  
てて……」

千夏「ノブ、これをどうする気なの？」

ノブ「え？ どうするって……スクープじゃないっすか。皆が探しているジェイが歌を投げ出して元カノの人妻の元に足繁く通ってるんすよ。これ、載せたら一気に函館注目浴びてうちの広告収入も伸びるじゃないっすか」

千夏「……この写真全部消して。データもね」  
ノブ「え？ なして？ 千夏さん見つけたらスクープだって言ってたじゃないっすか」

千夏「ノブ、こちらは三流芸能誌じゃないのよ。規模は三流でも一流の心構えでやってるの。芸能界を辞めた一人のプライベートを暴いて読者の支持が得られると本気で思ってるの？」

ノブ「いや……でも……」

千夏「私が言ったのはコンセンサスを得て今のジェイの生の気持ちを語ってもらうこと。そのインタビューを取ること」

ノブ「……」

千夏「こちらは情報誌なのよ。情報ってのは何もかもさらけ出すことじゃない！

受け取る相手が発信された情報で間違った判断をしないこと。その為の配慮が必要なの。それがわかんないようならこの仕事辞めることね」

ノブ「…………」

### ○透のアパート

透の部屋の前にぼんやり立つ玉子。

玉子「……」

○松前旅館・中庭

掃除している健吾。玉子がやってきて、

玉子「透さんからまだ、連絡有りませんか？」

健吾「携帯も電源切ってるみたいだね」

玉子「もしかしてもう函館にいないのかも」

健吾「あいつは黙っていなくなるやつじゃない。心配することね」

玉子「……なんででしょうね。連絡つかないのにこのまえみために心配じゃないんです。そのうちひよっこり現れるような気がして」

健吾「……花南もおんなじこと言ってたことあったべな」

玉子「花南さんが？」

健吾「高校ん時の話だ。山岳部で大雪山の

旭岳に登った時、透がはぐれて帰ってこないことがあった」

玉子「大雪山……？」

健吾「救助隊も出て日も暮れかけてきて女子の中には泣き出すのも出てきて。そしてたら花南が気丈な顔して、大丈夫、透はきつとひよっこり帰って来るってな」

玉子「……」

健吾「そしたら日も暮れて真つ暗な中、透が雪まみれになってドアの所に立ってたんだ。みんなそりゃもう驚いて、泣き出して……なのに花南は透を見て大笑いして。みんな呆れて見ていたら透も大笑いして。花南と二人おかしくなったんだべかと思っただ」

震えて涙ぐむ玉子。

健吾「透に聞いてもさっぱりわからん。雪ん中に埋もれてもうだめだと思つてたら突然体の中に暖かいものが入つてきて体が自由に動いたつて言うんだわ。みんな透がおかしくなつたんだと思つてた」

俯き、涙を流す玉子。

気付かずに話し続ける健吾。

健吾「でもそれから確かに透は少しおかしかった。なんていうか、うまくいえねども。眩しいっていうか、近寄りがたいっていうか……それまでそんなこと思つたことなかつたから不思議だつたべ」

涙を拭う玉子。

健吾「不思議って言えば、ある時全校生徒で校歌を歌つたことがあつただけんど、やたら耳触りのいい声が聞こえてきて皆

黙つちまつた……透の声だつたんだ」

○（回想）高校・体育館

生徒たちが校歌を歌っている。  
歌を止めて透の方を見る生徒たち。

○（回想）同・廊下

いろいろな生徒に声をかけられる透。  
健吾の声「透は合唱部やら軽音部やら演劇部やらいろいろ誘われて応援として度々駆り出されるようになったんだ。そしてらある日東京から人がやつてきた」

○（回想）同・校長室

校長室に入つて行く透。  
校長の前に美里（40）が座っている。

健吾の声「悪い話じゃなかった。両親を早くに亡くしてじいちゃん、ばあちゃんに育てられた透には東京に行くことが自然に思えた」

ジェイを捜しにきた子だって透が言った」

玉子、声にならず泣き出す。

健吾「玉子ちゃん……？」

### ○（回想）同・出入り口

立ち話をしている校長、美里、透を教室の窓から見つめる花南。

### ○函館港・埠頭

泣いている玉子。

健吾の声「花南も東京行きを勧めた。その頃二人の関係はあずましくなかったけど花南は透のことだけを考えていた。透は東京行きを決断したんだ」

玉子のM「……私だったんだ。透さんと花南さんの運命を変えてしまったのは……」

× × ×  
（回想）

大雪山・旭岳。

雪に埋まっている透の口に金色に光る珠を入れる子狐。

### ○松前旅館・中庭

玉子「（俯いたまま）……ジェイですね」

うっすらと目を開ける透。

健吾「玉子ちゃんは気づいていたんだべ？」

玉子のM「私が人間に狐の魂を入れてしま

ったから。罰だ。権現様の罰だ。ごめん  
なさい、ごめんなさい。花南さん、透さ  
ん……」

× × ×

ぼんやりしている玉子。

離れたところでノブがあーあ、と大

声を出して、ため息をついている。

玉子「(見て) あ……」

ノブ「あ……」

× × ×

二人並んで、

玉子「ノブさんも大きなミスを？」

ノブ「ああ。やっぱり千夏さんにはかなわねえ。

俺なんか全然だめだ。千夏さんの事好き

だなんておこがましいのにもほどがある

……」

玉子「……………」

ノブ「こんな半人前じゃいつまでたっても

男として見てくれるわけねえな」

玉子「ホントに。私って一体何なんでしょう」

ノブ、玉子「(ため息をついて) ……」

### ○松前旅館

健吾が封筒を手にしている。

健吾「どうすべ。透がいないんじゃない……」

### ○ハコタン編集部

千夏がパソコンでSNSを見ている。

千夏「あら？」

エリ「どうしたんですか？」

千夏「ジェイの目撃情報が出てる……」

エリ「いつものことじゃないですか」

千夏「違うのよ。函館周辺だよ」

エリが千夏のパソコンを覗く。

エリ「ほんとだ。駒ヶ岳、大沼、七飯。あ、

これなんか画像つきですよ」

バイクにまたがっている後ろ向きの

男。

エリ「これ……後ろ姿だけど透さんじゃない

くてジエイに見えますね」

千夏「……」

### ○道道1160号線

バイクに乗って旭岳を見つめる透。

携帯で花南の写真を見る。

透「じゃ、また明日くるよ」

花南「……待って！」

振り向く透。

花南「……」

透「どしたの？」

花南「……行かないで。ここにいて……」

透「……」

花南「怖い。明日が来ないような気がして」

透「花南……」

透が花南の手を握りしめる。

花南「……10年前も同じことを言いたかつ

た。本当はどこにも行ってほしくなかつ

たの」

透「どこにも行かないよ。傍にいる。東京

に行くべきじゃなかった。何もしてあげ

られなくてごめん……遅くなってごめん

### ○(回想)病室(夜)

ベッドの花南の傍から立ち上がる透。

……」

涙ぐむ透の頬に触れる花南。

花南「……でもね。初めて透の歌がラジオから聞こえてきたとき、すごく幸せだった。いつまでも聴いていたかった。聴いてる時はいつも透が傍にいるような気がしたの」

透「……」

花南「だからね。私がいなくなったらまた歌ってほしいの。透を待ってる人の為に……」

首を横に振る透。

花南「でも、それまではわがまま言わせて。そばにいて。私のそばを離れないで……」

花南を抱きしめる透。

透「花南、どこにも行かない……」

## ○国道5号線

透がバイクで走っている。

通りすがりの車がクラクションを鳴らし、停まって振り返る透。

美里が車から顔を出している。

透「香田さん……」

美里「良かった、会えて」

透「どうしてここに……」

美里「ネットの力と私の感を侮ってはいけないわ。あなたを十年育ててきたんですもの」

透「……俺、もう戻るつもりないから」

美里「透、わかってる？ あなた今すごく無防備よ。ジェイ丸出し」

美里を睨む透。

美里「彼女、亡くなったんですって？」

透「……」

○松前旅館・ロビー

健吾が玉子に封筒を見せる。

玉子「なんですか？」

健吾「花南から透に宛てた十年目の手紙だ」

玉子「！」

健吾「花南は透が東京に行ったことを後悔

していると言っていた。二度と歌わない

とも」

玉子「……」

健吾「けんど透はもともと音楽が好きでよ

くGLAYの歌を歌ったりしてたそうだ。

俺は鼻歌程度しか聞いたことなかったけ

んど」

玉子「……透さんの声は……」

健吾「旭岳で死にかけて生き方を変えたん

だべ。人間そんなもんだ。前向きになっ

て何にも臆するところが無くなった。だ

から透の歌はまっすぐに響く」

玉子「……」

健吾「花南は透に歌い続けてほしいと願っ

てるんだけど透は首を縦に振らなかつ

たらしい。これは花南の最後の願いだ。

花南のホントの気持ちだ。だがこれを見

せて透が歌うかどうか……」

玉子「……」

健吾「俺も透には歌ってほしいと思う。何

かい方法がないだべか」

玉子「……」

## ○穴澗海岸（夕）

夕日を見つめている玉子。

玉子のM「私がジェイから狐の魂を取って

しまったらジェイは歌えるのだろうか？

ジェイの声は大丈夫なんだろうか？ 権

現様、教えてください」

バッグからハコタンの冊子を取り出

す。

## ○ハコタン編集部

玉子がドアから覗いている。

ノブ「（気付いて）玉子ちゃん……？」

千夏「あら、あなた……」

玉子「こんにちは。相談したいことがある

んですけど……」

花南の手紙を呼んでいる千夏とノブ。

千夏「ジェイが再び歌ってくれるかどうか

はわからないけど……ひとつ方法がある

わ」

玉子「どうするんですか？……」

千夏「今、函館周辺でジェイの目撃情報が

出てるの。ファンは函館を注目してる。

だからね、ファンの力を借りるのよ」

千夏がパソコンの編集画面を開く。

千夏「ファンに集結してもらおう」

『函館からジェイにメッセージを送る

う！』と入力する千夏。

『7月25日、午後7時。場所は……』

送信を押し、

千夏「これでよし！ FMいるかにも友人

がいるから応援頼むわ。後はジェイを連

× × ×

れ出すことができれば……玉子ちゃん出  
来る？」

玉子「……やってみます」

千夏「ノブ、ジェイが現れたらインタビュ  
ーの承諾取って。写真も正面から撮って  
ね」

ノブ「千夏さん……」

千夏「生きてる限りやり直しは利くのよ。

何度でも」

ノブ「(涙ぐみ)……はい！」

### ○松前旅館・ロビー

健吾の携帯が鳴る。透の表示。受けて、  
健吾「透？ 透だべか？ どこにいる？」

え？ え？ 何？」

外を見ると旅館の前に美里と透が乗

った車が停まっている。

### ○同・応接間

美里、透にお茶を出す健吾。

健吾「捕まっちゃったただべか」

美里「あら、人聞きの悪い。社長としては  
ジェイの今後を心配するのは当然よ」

健吾「すまねえです……」

透「このまま帰ってください。話し合いは  
したはずです」

美里「タイミングが悪かったわね。彼女が  
亡くなったから連れ戻しに来たわけじゃ  
ないのよ」

透「……」

美里「事務所にね。ファンからの反応がす  
ごいの。メールが毎日何百何千と来てる

わ。ジエイに戻ってもらおうって運動しているファンサイトも出来て……」

透「もう、戻りません」

健吾「……」

透「今更時間は戻せないけど東京に行くべきじゃなかった。函館にいるべきだった。そうしたら花南はもつと幸せだったかもしれない」

健吾「そうだべか？」

透「！……」

健吾「花南が幸せだったかどうかなんて本人にしかわからないことだべ。透が東京行きを止めて花南の傍にいたとしてもそれが花南にとって幸せだったかどうかなんてわからんべ」

透「……」

健吾「確かに花南は辛いことが多かった。だどもお前の歌を聴いてる時は幸せそうな顔をした」

× × ×

(回想)

オーディオプレイヤーで嬉しそうにジエイの曲を聞いている花南。

× × ×

健吾「花南にとってジエイの歌は毎日の希望だったに違いね。そう思ってる人間は花南一人じゃないと思う……」

透「……」

美里「そうね。あなたの歌を聴いて毎日を生きてる人は多いはず。花南さんのようにね」

透「……」

○同・前（夕）

美里が車に乗っている。

外に立っている透と健吾。

美里「（透に）一度東京に戻るわ。また、来るから。それまでのんびりして」

透「……」

去つてゆく美里を見送つて、

健吾「透、実はな。花南から預かった手紙があるんだ」

透「！」

健吾「自分がいなくなつた後、もしもお前が歌を歌わなかつたら渡してくれつて」

透「……」

健吾「花南に見せてもらった。お前に歌を

歌い続けてもらいたいって内容だ。さつき俺が言ったような事だ。皆の希望にな

つてほしいつて」

透「その手紙は？」

健吾「今、玉子ちゃんが持つてる……」

透「……彼女は今どこに？」

健吾「さつき連絡があつてな。函館山登るつて言つてた。観音様の近くに手紙を埋めて来るつてな」

透「……」

健吾「透が手紙を見たらまた迷うかもしれないうつて。透がホントに歌いたくねえなら透をこれ以上辛い目に会わせたくねうつて言つてた」

透「……」

○函館山・展望台（夕）

ノブと一緒に函館の街を見ている玉

子。

ガスが掛かり始めている。

ノブ「まずいべ。ガスがかかってきた」

玉子「函館の今夜の天気は……？」

ノブ「(携帯を見て) 曇りのち晴れ」

玉子「(祈って) どうか、風が吹いてガスが

晴れますように」

ノブ「肝心のジェイは来るべか」

玉子「わかりません……でも、来なくても

伝わると思えます」

眼下の街にカメラを構えるノブ。

花南の手紙を取り出して見る玉子。

玉子「花南さんがそう願っているんだもの」

と突然風が吹き手紙が飛ばされる。

玉子「あ！」

風に舞って遠くまで飛ばされる手紙。

玉子「手紙が！」

駆けだしていく玉子。

ノブ、手紙に気づかず、

ノブ「玉子ちゃん？ どした？ どこ行く

んだ？ 玉子ちゃん！」

### ○函館の街(夕)

美里が車の中から手にキャンドルを

持った人々を見ている。

美里「お祭りでもあるのかしら？」

車から顔を出し通りすがりの人に、

美里「何かあるんですか？」

ファン「ジェイにメッセー지를送るんです」

美里「！」

○函館山・登山道（夕）

登山道を降りながら手紙を捜す玉子。

玉子「たしかこつちの方に落ちて行つたん

だけど……どうしよう。大切な手紙……」

木の枝の先に引っかかっている手紙

が薄日に照らされ白く光っている。

玉子「あつた！」

ガードレールをまたいで手紙に手を

伸ばす玉子。

枝がみしみしと折れ、落ちそうにな

る。

玉子「ああっ！」

玉子の左腕をとつさに掴む透の手。

玉子「！……」

透「何やってんだ！ 早く、上がれ！」

枝の先の手紙を見て、

玉子「手紙が！ 花南さんの大事な手紙

……」

透「いいから！」

玉子「でも……」

透「馬鹿！ 落ちるぞ！」

玉子「だって透さんに見せなきゃ。花南さ

んがホントの気持ちを書いた手紙」

透「わかってる！ 全部わかってる！ だ

からもういいんだ」

玉子「もう、いいって……」

透「花南の気持ちも、玉子ちゃんの気持ち

も全部わかったから。だから俺の手を掴

んでくれ！」

玉子「……」

右手で透の手を掴む玉子。

引き上げられ透の腕に抱きかかえら

れる玉子。

風が吹き、手紙がさらに遠くに飛ばされる。

玉子「(見て) あ!……」

透「(見て) ……」

透の腕の中で大泣きする玉子。

玉子をそっと抱きしめる透。

### ○緑の島(夜)

キャンドルライトを持って集まる人々。

千夏が声をかけている。

千夏「蛍光線の所に並んでください」

美里がやってきて、

美里「なんなの、これは?」

千夏「ジェイに歌ってもらいたいって言う

ファンのメッセージです。どうぞ」

美里にキャンドルライトを渡す千夏。

### ○函館山・展望台(夜)

玉子と透がやってくる。

ノブが玉子を見て、

ノブ「玉子ちゃん、どこいったんだべ。

心配したべ……あ……」

透を見て、

ノブ「来てくれたんだか……」

透「函館の街と一緒に見てくれって」

ノブ「そっか……ちようどガスが晴れてき

たところだ」

玉子「良かった……」

眼下に広がる函館の夜景。

夜景を見つめる透と玉子。

玉子の視線は左下を向いている。

麓のガスが晴れてくる。

港の人口島、緑の島にキャンドルライ

トで出来たJの文字が浮かび上がる。

文字は徐々に形になってゆく。

メッセージに気がつく透。

光の列が連なり文字になってゆく。

『J うたって』

透「(見て)……」

ノブ「あれはジェイのファン一人一人が集

まって作っている光の人文字だ。みんな

ジェイを待ってるんだべ」

透「……………」

ノブ「みんなもう一度ジェイの歌を聴きた

いと思ってるんだ」

透「……………」

玉子「私も……私も聴きたい……人間でい

ることは辛いけどジェイの歌があれば生

きていける」

人文字を見つめ続ける透。

× × ×

(回想)

花南がベッドで透の手を握り、

花南「もう一度歌って……」

× × ×

涙を流して文字を見つめている透。

### ○松前旅館・応接間

美里にお茶を出す健吾。

健吾「東京さ、帰らなかつたんですか？」

美里「(興奮して) 函館アリーナでジェイの

復帰コンサートをやるわ!」

健吾「ええ？」

玉子がやってきてきて透の寝顔を覗き込

○ハコタンのウェブサイト

〈ジエイ独占インタビュー。函館で復帰ライブをやる意味を語る！〉

九尾の狐が現れて頭の上を漂う。

玉子「(狐を見上げ) わかってます……」

透の口に唇を近づける玉子。

玉子「……………」

○ツイッター画面

〈ジエイ、函館で復帰ライブ！ 絶対行く！〉

躊躇して止める玉子。

玉子「(狐を見上げ) さようなら……」

狐がくるくると回ってぽんと消える。

〈ジエイ、また歌うって。函館だよー。

みんな行こうよ〉

○ハコタン編集部

〈キャパ少ない！ チケット取れない

ノブが写真の整理をしている。

よお〉

ノブ「なんだべ？ 光の加減だべか」

千夏「(覗いて) どうしたの？」

○穴澗海岸(夕)

透がまどろんでいる。

展望台で透と玉子を撮った写真。

玉子の後ろに金色の光る尻尾のよう

なものがうつすらと映っている。

千夏「(笑って)尻尾みたいね」

ノブ「……玉子ちゃん、どうしているべな。

急に帰っちまって」

千夏「ジェイのライブまでには戻って来る

よ」

ノブ「だな。キツネの玉子ちゃん！」

### ○函館アリーナ・前

ジェイのライブに続々と人が集まる。

アリーナ前に立つ玉子。

玉子のM「人間でいることは辛いけどジェ

イの歌があれば生きていける」

幸せそうに会場に入って行く。

〈終〉

本電子書籍は、2016年12月9日発行の『第22回函館港イルミネーション映画祭2016第20回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第22回函館港イルミネーション映画祭2016  
第20回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

## 函館ラブ・ストーリーズ

作：日登美 杏

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2017年2月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>

---